

実践報告

コロナ禍の日本語学級の取り組み「おいしいってなに？」

—体験によることばの学びの場を作る—

宇野 英理子 (港区立筭小学校)

1 実践の場の特徴

東京都の認可により、日本語習得を目的とした授業を行うために設置された23の学級の中の1つ。3名の専任教諭と35名の児童が在籍し、通級指導を通して帰国児童及び在日外国人児童等の支援を行っている。児童は家庭では母語による会話が中心で、日本語の獲得は学校での学習や経験が多くを担っている。

2 実践の枠組み

コロナ禍で個別学習が中心となり、学習場面での児童間のことばのやりとりが減ったため、ことばの力の向上の鈍化を感じていた。そこで共通体験を基に、児童が学び合いに繋がることばのやりとりを行うことで、ことばの力を伸ばすことができるのではないかと考えた。

3 実践の目標と計画

3.1 対象児童

それぞれ国籍、母語、滞日期間、日本語の力の異なる2つのグループで実施した。

3.2 実践の目標

- ・体験に基づいてことばの意味を理解し、使うことができる。
- ・共通の体験を基に、友だちに自分の感じたことを話すことができる。

3.3 全体の流れ

活 動	支援の工夫
5月～ 大豆の植え付け、栽培、水やり	
7月 枝豆の食味実験 【本時】	
① 本時の流れの確認	・ 具体物を見せて説明する。
② 「異なる茹で時間の枝豆」の食味実験 1) 「おいしい」について話し合う。 2) 実験を行い、観察・試食する。	・ おいしさを表現するための観点(五感)の提示と、五感の表現の共有と説明。 ・ 分からないことばは言い換えをする。
③ 結果・振り返り 「おいしい」について話し、交流する。	・ 呟きや体験の記録を基に、自分の感想を話す。

9月～ すがたを変える大豆「国語3年 下」光村図書	
------------------------------	--

4 実践の様子

(1) 「おいしい」について話し合う。

まず、具体物を示し、実験用具や流れを確認した。次に「おいしいって何ですか?」と具体物や動作化を取り入れながら五感での感じ方を提示して問いかけた。すると児童は自身の経験から五感にそった様子を表す語彙を使って表現した。教師はそれらを意味と表現が結びつくように、絵で感覚別に整理して板書し、他の児童が理解できるように支援した。

(2) 実験を行い、観察・試食する。

どの枝豆がおいしいか、茹で時間に1分・5分・10分と差をつけた枝豆を観察、試食する体験をした。共通点や相違点を問いかけると、児童は事前に共有した語彙と自分の知っている語彙とを組み合わせ、感じたことを表現した。自分の経験と他の児童の発言とを繋げて表現したり、iPadの写真を指し示しながら表現したりする児童の姿もあった。

(3) 学習のまとめをする。

児童が表現した言葉を教師が感覚別に整理、板書して示し、対応するiPadの写真や具体物を提示した。児童は「そういうこと」「うんうん」と呟いたり頷いたりしながら「おいしい」という抽象的なことばの感じ方は、個人の枠組みによって異なることを理解していた。そのうえで、本時で取り上げられたことばや文型について振り返った。

5 結果と考察

本実践では、児童が枝豆の食味実験を共通体験したことを通して、体験とことばを繋げてことばの意味を理解したり、他の児童が表現した言葉と自分の感じたこととの共通性に気づき、様子を表す語彙や比較する文型を新たに獲得したりすることができた。本時は時間の制約もあり話す・聞く・読む活動を中心に行ったが、今後は書く活動を加えた構成に改善し更なることばの定着を図りたい。

【引用文献】

齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子編著(2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践』くろしお出版

今井むつみ(2020)『親子で育てることば力と思考力』筑摩書房

今井むつみ(2020)『言葉の意味が分かること/光村図書令和2年版国語5年』光村図書

文部科学省(2003)『学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について(最終報告)小学校編』